〇作文　青森県児童文学研究会　会長　野澤秀昭　氏

　ごはんとお米に関する体験が、小学生らしく素直に表現されています。そこには、「私にもできるんだ」という喜びがあり、幼少時代で最も大事な自己信頼の根が確かに育っているな、と実感しました。

　中学生になると、これまでの経験の再確認を通して、食の安全安心という点でも世界的に注目されている「米文化」、その青森県の米作りに対する信頼と誇りが表現されています。

　視野も広く考え方も深くなっている点はさすがです。

〇作文　東奥日報社　編集局生活文化部　生活文化部長　斉藤光政　氏

　私は新聞記者なので、どうしてもこだわって見てしまうポイントが３つあります。それはリズムが良いか、テーマを的確にとらえているか、そして読み手に分かりやすく伝えようとしているか―です。その意味では、入賞者、特に上位の方々はそれらを満たしているのは言うまでもなく、それ以上に「自分」を訴える力を持っているのだと思いました。文章は社会生活の中でとても役の立つツールです。それは電脳社会がいかに進展しようと変わらないことです。児童、生徒の方々にはこれからも自分独自の文章力を磨いて、堂々と社会に出て行ってほしいと願います。

〇作文　青森市立女鹿沢小学校　　校長　長崎雅仁　氏

　今年も、たくさんの小中学生の皆さんの作文を読ませていただいました。今年は特に、ごはんやお米に関わる体験を通して、人と人との結びつきを描いた作品が多かったように思います。自分自身の体験だからこそ、借り物ではない意見をもつことができたのだろうと思います。ただ、せっかくのよい題材、よい体験を書いていても、改行がされていない作品があったのは残念です。ぜひ、段落意識をもって文章を書く習慣を大切にしてください。

○作文　青森市立沖館小学校　教頭　原子雄治　氏

作文部門へのたくさんの応募ありがとうございます。多くの作品が実生活の一場面に見られるお米とのかかわりから書かれていました。やはり実体験について書かれた作品は説得力があります。その中で、読み手に訴えかけてくる作品はさらに深く考え、今後自分は何をできるかにまでふれたものでした。その際、「次は～したい」にとどまらず、今できることから実行に移していることが見られたのは素晴らしいことです。

今夏の日照不足について危惧したことにふれた作品も見られ、お米について考えることから社会との関連をも考える機会になっています。

作文は自分の感動を伝えるものですので、自分の心が大きく動いた場面が重要です。その出来事については詳しい描写があるとさらに読み手に伝わることでしょう。

最後に、お米のみならず、自分を取り巻く人々への感謝の気持ちを素直に表現している作品がたくさんありました。今回この作品を書き上げることで改めて気づけたのではないでしょうか。

○図画　青森県児童美術研究会　理事　大宮賢吉　氏

第36回を迎えられた「ごはん　お米とわたし」の図画コンクール審査会場には、多くの絵がならんでいました。

第１部（小１、２、３年）では「ごはんが大好きです。」と、画面の中に自分を大きく描き、ごはんを食べる楽しさを、口をいっぱいに開き、おいしそうに食べています。大きな目が子どもの心を表しています。

第２部（小４、５、６年）では、田植えをしたり、お米をとぐなど自分もお米作りに興味を持つようになり、仕事をしている様子がよく描けています。お米の白さや、稲穂の色もよく工夫され、よい色調となっています。

第３部（中学）では、田植えや稲刈りの絵が多くなります。大きな目で、手に握りしめた稲穂を見つめ、真剣に稲刈り作業をしている場面が、しっかりとした線で表現されています。人物の色や稲穂の色もよく考えて描写され、とてもよい絵となっています。

〇図画　青森県児童美術研究会　理事　工藤玲子　氏

ごはん・お米とのかかわりを工夫して描いた作品が多く、どの作品からも喜びの声、感動が伝わってきました。題材として取り上げられていたのは、学校の友だちや家族と一緒におにぎりやごはんを楽しくいただく場面が多く、表情豊かな人物表現や輝いている一粒一粒のお米からその美味しさが感じられました。今年は、田植えから稲刈り、はせがけなど稲作の体験や、全体をとらえた水田や稲穂の美しい風景、米とぎ、おにぎり作り、笹巻きなど多岐にわたり、それぞれの個性が光っていました。

〇図画　青森県児童美術研究会　理事　中谷則子　氏

大好きなご飯を家族や友達と食べる様子、田植えや稲刈りなど米作りを頑張る様子、美味しいおにぎりを作ったり食べたりする様子などを工夫しながら頑張って表現した素晴らしい作品に数多く出会うことができました。

その他、身近な生活の中から見つけたご飯とお米の題材を上手に表現した作品も目を引きました。

表したい思いを強く持ち、心を込めて頑張って表現した絵からは、喜びと感動が伝わってきます。明るく楽しく豊かな絵を今後も期待します。